

2022年度 日本インターンシップ学会東日本支部 第1回研究会報告

報告者 松坂暢浩（東日本支部 支部長）

2023年1月28日（土）13:30より2022年度第1回研究会を対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド形式で開催いたしました。当日は、全国から25名（対面参加10名、オンライン参加15名）の大学教職員、民間企業など多様な皆様に参加いただきました。

第1回研究会は、2022年度の支部研究会のテーマである「インターンシップの実践事例を研究につなげる」に基づき、インターンシップの実践事例を研究につなげるためのポイントについて学習しました。支部運営委員の二上武生先生（工学院大学）がコーディネーターとなり、リサーチクエションや仮説の立て方、効果測定の方法などについて問題提起いただき、パネリストの山本美奈子先生（山形大学）より実践研究の事例を基に具体的に解説いただきました。会場参加の先生からは、今回の話を聞き、現在研究で悩んでいた点が解消され、研究に対するモチベーションが高まったというコメントがありました。

また、自由研究発表では「複数部署の体験が可能となるインターンシッププログラムの開発ー愛知県瀬戸市役所の事例よりー」と題して、瀬戸市役所の若村和輝様と名古屋産業大学の今永典秀先生にご発表をいただきました。公務員や行政を対象としたインターンシップ研究が少ないなかでの貴重な実践事例の報告であったこともあり、参加者の関心も高く、活発な質疑応答が行われました。

研究会後の参加者アンケートでは、10名の参加者から回答があり、研究会の満足度は「大変参考になった」「参考になった」あわせて100%でした。また、今回内容の続きを聞きたいなどのコメントをいただきました。これらの声を踏まえて、次回3月開催予定の第2回研究会は、今回の内容を継続して行えないか検討したいと考えております。



新たな疑問

- 1. リサーチクエションの立て方**

「実践研究において、解決が必要となる問題を解こうとすると、どうしてもリサーチクエションが大きくなり、また、明確化しづらい」（真嶋, 2015）
（ex○○の質を向上させるためのプログラム）
⇒先行研究の徹底調査？どのようなレベルのもの？
- 2. 効果設計・検証の仕方**
 - ・仮説から効果設計へ ⇒具体的にはどのようにする？
 - ・汎用的示唆をもっていき効果分析⇒具体的にはどのようにする？
（単なるアンケートの集計結果では×）
- 3. 活動の概要の説明の仕方**
 - ・有用性を示す（なぜこのような活動？）（前提となる概念や考え方とともに）
⇒例えばどのように示す？
- 4. 考察の内容**
 - ・汎用的な示唆（再現性）（一般化）にもっていく ⇒どのようなレベル？
 - ・理論との結びつけ ⇒例えばどのように示す？